

長岡開府400年

vol.9

# ROOTS

# 400

越後  
長岡



<特集>

## 牧野忠精ただきよの

ルネサンス

## 発刊趣旨

英語の ROOTS (ルーツ) は、樹木の根や物事の始まりを意味します。また、先人や祖先の意味も併せ持ちます。「越後長岡 ROOTS400」は、開府 400 年を迎える長岡の歴史を遡り、まちの ROOTS を探ります。



歌川豊国画 両国橋花火之図(寛政末～文化初年頃)

初代豊国の描いた五枚続きの作品。両国橋は隅田川に架かった上総の国と武蔵の国にまたがった橋。江戸が繁昌してくると、町が橋を渡った向島、本所の方まで発展し、町人たちの生活も一気にはなやかなものとなった。この図には賑わう西詰を中心にさまざまな町人の生活が描かれている。ちょうど、長岡藩主牧野忠精が幕政を執って経済政策を実施し、庶民もその豊かさを享受しているような錦絵だ。厚木市教育委員会所蔵。



牧野忠精画「雨龍大黒天図」

牧野忠精は甲子大黒天の雨龍の図に始まって、たくさん雨龍の大黒天図を描いている。それを家臣や庶民に与えて、心をなごませた。もらった方は、藩主からのもので粗末にできず、掛軸などにして飾っている。不思議なことにご利益はあったらしい。

長岡開府四百年記念事業実行委員会 会長 磯田達伸

百五十年も前に封建時代は終わりました。そこで、人びとの価値観は大きく近代へ変針しました。しかし、長岡は不思議なまちで士魂商才が理想となり、実利的な合理性が重んじられることになります。そこには長岡藩が培ってきた「常在戦場」の精神が息づいていたといえましょう。

戯曲「米百俵」で小林虎三郎が「常在戦場」の掛軸を前に人づくり教育を説くのは戦禍の受難から復興の心が人びとのなかに生まれたからです。現代の産業は日進月歩。人工知能を応用した工業技術力の増進は直近の課題です。創造という世界の価値観も刻々と変化し、また、若者の流行という価値観も変わっていきます。捉えようのない価値観に対し長岡は「新しい米百俵」という不易の価値観を創造しようとしています。次なる百年への第一歩として長岡藩の常在戦場の精神を全く違うものに変えた九代藩主牧野忠精のルネサンスをとりあげてみました。現代風にいえばイノベーションです。長岡の歴史が持っている不思議な力で新しい産業文化都市をつくるうではありませんか。

## 巻頭言

# 雨龍の殿様の面目躍如



三島／丸太早切

和島／良寛

与板／打刃物

中之島／大風

寺泊／魚の市場通り

越路／ホタル

ものづくり

長岡／長生橋、長岡花火、水道タンク

栃尾／あぶらげ

小国／小国和紙

山古志／錦鯉

生姜醤油ラーメン

日本酒

川口／かまくら

アオーレ長岡

九代長岡藩主の牧野忠精は幼いころから、中国人が想像した雨龍の絵を描いた。忠精は、一筆で二気呵成に雨龍を描き絵に絶妙なユーモアを醸す天才だった。むしろ、その絵は世の中の矛盾を衝く風刺画に近かった。殿様が世を風刺する面白さがあった。その絵を徳川將軍家に献上し、また家臣や民衆にも頒け与えたという。もらった方は、喜んだり、あきれたりそもそも、雨龍は日照りの田畑に慈雨をもたらす奇瑞の想像上の小龍である。人間の心のなかにも住んでいるという。その雨龍が人の運命を左右することもある。面白いテーマにとりつかれたものだ。牧野忠精はいままでの藩主が成しとげられなかった徳川氏譜代の栄誉である幕閣に入ることができた出世の糸口になった雨龍百態画は残っていないが十三態画が長岡市立中央図書館にある。雨龍が茶道や囲碁を楽しんだりして人間生活をしている。民衆の視点で世の中をみつめることができた忠精は、封建領主としてはめずらしく現実をみつめる人物であった。その牧野忠精の描く雨龍が人間の歴史に及ぼす

良しあしを探ってみようと思う。開府四百年の記念の二〇一八年。雨龍の眼は現代の何をとらえて、何を生き継いで未来に何を残してくれるのかを考えよう。

牧野忠精は宝暦十年(一七六〇)十月十九日、第八代藩主忠寛の長男に生まれた。備前守に任じられてから忠精の幕閣内での出世は、越後長岡藩の奇蹟といわれるくらい、めざましいものであった。因みにその経過を誌す。

牧野忠精の出世は、安永五年(一七七六)六月の江戸城西丸大手門勤番に始まり、天明元年(一七八一)四月の奏者番勤続六ヶ年、天明七年(一七八七)九月の寺社奉行五年、寛政四年(一七九二)八月大坂城代六年半、寛政十年(一七九八)十二月京都所司代二年半。享和元年(一八〇一)七月老中十六年。文化十三年(一八二六)九月老中を辞す。文政十一年(一八二八)二月老中三年を勤め天保二年(一八三一)四月に七十二歳で没した。

なお、牧野忠精が現代の長岡を風刺するとすればどんな情景が浮かぶかをイメージしたものを掲げた。

# 牧野忠精は何故に輝いたのか

## その政治力

九代藩主牧野忠精は、それまで培ってきた長岡藩風の「常在戦場」の精神を、時代に即応した多様な考え方を肯定する思想に変えています。それが牧野忠精のルネサンスといわれる所以です。

忠精の幼名の新次郎は、七万四千余石の譜代大名牧野家を嗣ぐことをしめすものであった。明和三年（一七六六）八月に父忠寛のあとをうけて数え年七歳で第九代長岡藩主となった。以来、天保二年（一八三一）四月に、七十二歳で没する直前まで、六十六年間、長岡の封建領主であり続けた。

幼少の頃、老臣山本老迂齋の訓育をう

けた。とはいえ、政治姿勢は聡明であった。「牧野家譜」は伝えている。

いまから百年前の長岡市は『長岡三百年の回顧』という小誌を発刊し、牧野氏治世下の領主をつぎのように評価した。初代牧野忠成の創業、三代牧野忠辰の中興、そして九代牧野忠精の幕政参画である。長岡藩の三名君と誉め讃えている。初代・三代はさておき、九代牧野忠精

が、何故、名君と敬称されたのかを検証してみよう。

牧野忠精のご威光で、信濃川水運も繁栄したし、新田開発が巧くいったという話もある。三潟（田潟・大潟・鯉潟）の干拓工事は、複雑に他領と交錯している、思うように開拓がすすめられなかったが、老中職の牧野忠精によって、進捗したと伝えられる。

### 老中牧野忠精の政策

牧野忠精が幕府の老中に就任したのは、享和元年（一八〇一）七月のこと。忠精の四十二歳のときである。それから十六年間、牧野忠精は將軍徳川家治、家斉に仕え、いわゆる江戸の化政文化を醸成することになる。

特に十一代將軍家斉の時代は長く、田沼意次、松平定信といった規制緩和時代、緊縮政策と極端な方針で分かれることもあったが、江戸文化が最高に熟爛した時代でもあった。江戸の庶民は、商業を発達させ、江戸を一気に消費都市に変貌させた。江戸では芸術文化が華開き、化政文化と謳われたのである。

その時代、牧野忠精は勝手掛老中とし

て、江戸の繁栄をリードしている。また勝手掛老中は將軍家斉の大奥の財源確保にも努めることになる。

そもそも牧野忠精が経済知識に強くなるのは、長岡藩の収支が寛政年間に赤字に転じたことにあった。新田開発をしても、幕閣に入ると藩財政から公費が支出され、収支が合わなくなる。そこで、松平定信のもとで節約を学ぼうとする。忠精ははやくから松平定信に近い大名として期待されていることになる。

寛政五年七月、松平定信は老中および將軍補佐役を辞任した。松平信明が定信の政策を引き継ぐが、牧野忠精も本多忠壽、戸田氏教といわゆる「寛政の遺老」となって低物価策や風紀の取締りなどを引き継ぐことになる。

江戸は天下の消費地である。特に上方（京・大坂）から物資が流入した。従来からあった十組問屋の制を改定し、塗物、畳表、酒、紙、綿、薬種に荒物、乾物、焼物、油などを加えて株数を整えさせたのも老中牧野の功績である。

化政期の江戸の商工業や文化の発達に、牧野忠精のルネサンスが役立った。

### 蒼柴神社の造営

牧野忠精が十歳の明和六年（一七六九）に、東山山麓の御林（のちの悠久山）に、蒼柴明神社（悠久山御社）の造営を決めている。明和八年八月八日には普請が始められた。同時に祭神の三代藩主牧野忠辰の五十回忌にあたることから、大明神号が贈進された。蒼柴大明神社（以下蒼柴神社）は安永九年（一七八〇）三月完成した。

蒼柴神社の造営は、牧野忠精が長岡藩政上に登場するうえで、重要なキーポイントであった。牧野氏が長岡に入封して以来、百五十年の歳月が、常在戦場の精神を風化させていた。世は泰平になれば、家臣に質素節約を励行させるむずかしさに直面していた。

蒼柴大明神は三代藩主牧野忠辰公である。忠辰は貞享・元禄のころ、衰退していた長岡藩政を中興した名君と尊称されている。それは戦国期から続いた武断政治の限界を見抜き、有能な官吏を登用して、文治政策をすすめたことに由来している。なかでも藩士の生活のあり様を定めた「諸士法制」の策定は著名である。忠辰はそのなかで、藩士たちに人生の道理を明らかにし、道を学ばせようとしている。それは物事の道理さえ理解できれば、



飯島文常画「雪中勢揃之図」(部分)  
藩絵師飯島文常の描く牧野軍団勢揃の図。全長岡藩兵の役割がわかる極秘の絵図。中央の雪壇に牧野公。九羅の旗は小馬標(こまじるし)である。軍旗や陣羽織、袖には五間梯子の藩印がつけられていたが、絵色の違いが極秘のため省略されている。背景は二の丸。松樹が多いのは戦時に松明などにするためといわれている。蒼柴神社所蔵。



十返舎一九著「金の草鞋」(早稲田大学図書館所蔵)

それぞれの確に判断し実践する能力が養われるというものであった。と同時に当時、幕府がすすめようとしている文教政策のひとつである明朝学（儒学の一派）は無用とした。明朝学とは陽明学派や朱子学派を意味するもので、当時、思想的にも活力を失ってしまっていた。特に忠辰は朱子学を好まなかった。そのかわり、日常生活に役立つ学問を奨励した。この考え方が、牧野家六代に仕えた家老の山本老迂齋に伝わり、古義学の導入につながっていた。

忠精は忠辰の教えを積極的に取り入れることにした。その一方、折衷派、陽明、朱子も併修させ自由研究として長所を学ばせている。そのシンボルとして、蒼柴神社の造営になった。

牧野忠精は、長岡藩創業以来の伝統である常在戦場の精神をルネサンスさせ、儒官高野栄軒・余慶父子を登用し従来の危機意識から生き残る思想に発展させている。

# 雨龍大変化の軌跡

雨をもたらすという伝説の龍。作物を育て、火難を消し去る。水に棲み、変幻自在に身をくねらす姿態はヘビやトカゲにも譬えられる。しかし、忠精が描く雨龍には、そんな一般的な言葉では捉えきれない、摩訶不思議なメッセージが見え隠れしているようだ。墨色一色。濃淡をつけながら生き生きと身をくねらす雨龍。君も試みに雨龍を描いてみないか。殿様の余芸とだけでは語りきれない、忠精の個性を発見するきっかけとなるだろう。

## 雨龍を観る雨龍

多彩な業績を遺し、寛政の改革で著名な松平定信に「芻頸の交をなす（特に親しい友として交際した）」と名を挙げられた忠精の実像には謎が多い。雨龍が雨龍を描いた画を観る。忠精は、書幅に描かれた雨龍なのか、書幅の雨龍を観る雨龍なのか。



雨龍の画を観る雨龍（「雨龍飲中八仙之図」）

## 忠精を支えた家臣

忠精は、数え年七歳で藩主となった。幼少のため、長岡への国入りは免除され、初めての長岡入りは十三年後、二十歳のときである。藩主としての力量を育てるこの大切な時期に、忠精を支えたのは、筆頭家老稲垣侯茂、次席家老山本精義（老迂斎）らで、山本のブレインの一人に長岡藩きつての学者、高野栄軒がいた。稲垣は杉本鍼子の六代前の先祖であり、高野は山本五十六の五代前の先祖である。五十六が山本家を相続することをふまえれば、山本精義は五十六の七代前の先祖といつてよい。長岡人の個性を代表する人物たちの淵源が忠精の時代にまで辿れることに歴史の面白さがある。後に、精義は「競々斎」の名で、また侯茂の子、茂邦は「蕭々斎」の名で雨龍を描くことを忠精から許可された。雨龍が長岡藩政の維持・展開を繋ぐ重要なキーワードとなったことは疑いない。

## 雨龍作品の誕生

天明七年（一七八七）、十一代将軍徳川家斉が誕生した時、忠精は長岡にいた。江戸に参勤した忠精は寺社奉行加役を命じられる。のちの栄進の先駆けである。その二ヶ月後、家斉たつての希望で、忠精は雨龍を献じた。『牧野家譜』によると十七体の雨龍が描かれていたといふ。いまのところ雨龍が初めて描かれたの



「雨龍飲中八仙之図」 文政7年(1824) 65歳頃

して自分自身を客観視できる。この精神は、幕末期に奇しくも発揚することとなった。

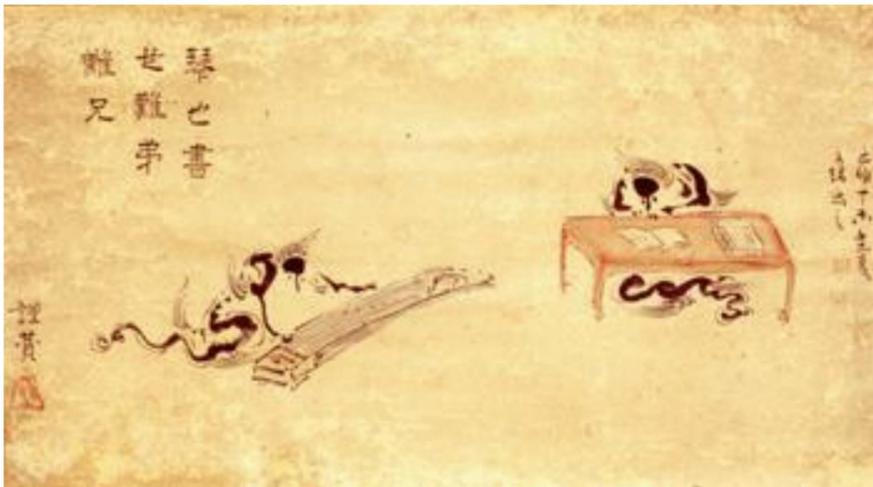
## 雨龍伝説の誕生

長岡藩幕末の三傑、河井継之助・小林虎三郎・三島億二郎は、長岡藩校崇徳館で学んだとみられる。長岡市立阪之上小学校に伝わる崇徳館の蔵書印にも忠精の雨龍は生き続けている。天に昇る雨龍と地に舞い降りる雨龍。それぞれ異なった様態であり、二体で一体の雨龍である。主観と客観。理論と実践。男性と女性。



長岡藩校崇徳館蔵書印記(印影)

殿様と領民。どのようなことばでも表現できる。一見、無関係で、対立するようにもみえる概念の共存を目指す。長岡人の個性の淵源に忠精の精神があり、雨龍はまさに長岡人の個性を育む伝説となったのである。



雨龍を弾く雨龍 天明7年(1787) 28歳頃



雨龍大黒天の図 天明7年(1787) 28歳頃



雨龍大黒天の図 寛政5年(1793) 34歳頃



雨龍大黒天の図 文政9年(1826) 67歳頃

は天明五年（一七八五）の作品「雨龍横巻十三態」でも、もつと牧野子爵家に伝来し、現在は長岡市立中央図書館が所蔵する。庄内藩主酒井忠徳のリクエストで制作された。念願の蒼柴大明神の悠久山遷座が成ったとはいえ、あいつぐ洪水、天明の大飢饉のさなかの出来事であった。

## 雨龍の大変化

いわゆる「福の神」、大黒天の作例が多い。年次を追うと胴部の変化が著しい。二十代の作品では墨色の濃淡に差があり、くねる身の描写もたどたどしい。三十代ではいくぶん一筆の線の長さも増すが、線の幅も一定していない。四十代・五十代と特定できる作例の発見を期待したいが、少なくとも六十代の作例では、身を一気に描き上げた、手慣れたようすが見える。爪や毛、小槌、頭中の描写などは



書をする雨龍（「雨龍横巻十三態」牧野子爵家旧蔵）

簡略化した印象もあるが、手足の位置や左肩に負った大きな袋の大きさなど、全体のバランスが実に良い。制作年が未記載の作例は、胴部が判定材料となる。

## 孤から和へ

四十代・五十代の忠精に、何があったのか。

忠精が京都所司代を拝命したのが三十

九歳。老中職にあったのは四十二歳から五十七歳。老中職再任が六十九歳から七十二歳。雨龍の大変化は、忠精が青年期から壮年期を経て、円熟期へと進む歩みと対応する。

二十代の忠精が描いた雨龍の作品に、兄と弟をテーマとしたものがある。兄弟という長幼の序。学問と芸事という役割の分担。そこには儒教の精神に立ちつつも、その可否を自問自答するすがたがみえる。賛を寄せた僧侶の言葉は重い。

一方、六十代の忠精が描いた学問のようすは、講義というよりも、むしろゼミナールのようにもみえる。左下の雨龍は横になっているのだろうか。型にとらわれない、自由な精神は、忠精が創始した長岡藩校崇徳館の教授風景かも知れない。

もう一度、初めの問いに戻ろう。雨龍とは何者なのか。

雨龍を描く雨龍。雨龍は描き、描かれる。つまり、時に忠精は雨龍となり、時に雨龍を眺める傍観者となる。時と

# 再び忠精によって生まれかわった 常在戦場の精神



片山翠谷画「端午節句 市中飾の図」

## 今に残る牧野忠精の遺風

そもそも参州牛久保以来の「常在戦場の精神」の根本を長岡に再現させたのは名宰相の山本老辻斎だった。忠精は祖父ほど歳の離れた老辻斎の教えを受け継いだ。単に前例の模倣はしない。常に戦場にのぞむ。心構えであれば、平時にも時代の変化に応じた判断を求められるゆえんである。

忠精は十六歳の若さで幕閣の一員となった。要職を歴任し、一年と英明さを増す藩主の姿には、藩内の意識も大いに高まった。

老中のとき、帝政ロシアの南下策による蝦夷地（北海道）の侵犯に悩まされた。長崎奉行肥田頼常が国禁を破ってロシア使節に病人の治療と船の修理を許した。その糾弾が起きるなか、忠精は奉行の人道的な判断を褒め、為政における寛容公平性を示している。

中央で活躍した忠精に長岡滞在の年月は限られていたが、臣下には文武を奨励し、賄賂を禁じ規律を正す一方で、見せしめの極刑は減じるなどの善政を敷いた。

となく、人材登用を心掛けること。諸士は町、郷中の事情に通じ、藩主にどしどし進言せよ」などと、崇徳館で培った学才を藩政で発揮するよう指導している。

こういった牧野忠精のつくった学問所が士風はもろろん、芸術文化、諸産業に従事する人材の発掘につながっている。

## 領民への恩寵

牧野忠精は領民と苦楽をともにした名君だといわれる。牧野家に伝わる「御家譜」には、「侯一代の御徳全く仁の一字に在り、人を愛する者は人常に是を愛し、人を敬する者は人常に是を敬す。民の憂をうれふる者は民また其を憂ふ。民の樂をたのしむ者は民また其たのしみを樂しむ。民の与する所天より是を祐く。吉にしてよろしからざることなし」とある。旧幕時代の町内会の自治や積立金が長岡病院の建設費の一部になった。

忠精は新田開発に力を入れた。西蒲原の大潟、田潟、鍔潟の治水を行った「三潟悪水抜」では十七ヶ村を拓き、新たに三〇〇〇石をもたらし、農村には儉約の触書をよく出してもいたが、三潟悪水抜と同じころに良寛を召し抱えようとしたのは、領民の窮状も理解した

た。参勤交代の随従者を大幅に減じたのも忠精の指示によるものだった。人間的な交流の表れだ。詩を嗜めば人間の喜怒哀楽に想像が広がり、それは領民にもおよんだ。忠精の思想を象徴する和歌が伝わっている。

戦の庭にあるぞと常にただ

おもふ心をたもて武士

村時雨雪やはるさめ五月あめ

しのぎてやすく渡る飛石

越後人の忍耐を表した処世訓とも読める。時雨から始まる長い冬。そして春を樂しむ時も短く梅雨へと入る。苦勞に頑なにならず、それをしのいで柔軟に生きると忠精は言う。

忠精の没後から三十七年後。北越戊辰戦争で長岡は城を失うが、藩は消えても「常在戦場の精神」が郷土の誇りとして受け継がれた。これは長岡城奪還の武勇



藩校崇徳館

が人びとの心を打ったからだといわれる。奪還戦を成功させるには、忠精が干拓せずに残した沼地「八丁沖」が要害としてはたらいだ。藩政にあたっては河川に河戸を設け、船の出入りを容易にし、商工業の振興につとめた。忠精の一代で、孝行などで表彰された者は城下のみで男女百五人に及び、男女九十歳以上には一人扶持、百歳には二人扶持を与え、郷村にも美風を広めている。また、売薬の価を定め、貧者の苦しみをやわらげた。

## 藩校崇徳館の開校

藩校崇徳館が牧野忠精によって開校したのは、文化五年（一八〇八）四月のことであった。城下の追廻しの角地に学問所として開校され、学館とも呼ばれた。

崇徳とは徳を尊ぶということであり、藩士の子弟が通うことになった。

最初、古義学派と古文辞学派（徂徠学派）が並立したが、のちに古義・朱子の二派となった。

崇徳館は長岡藩政の文教政策の一環として、有為の人材を輩出する教育機関となった。詳述は他紙に譲るが、牧野忠精が没した天保二年（一八三一）に、都講をつとめた秋山景山が「諸役人心得」をあらわしている。

「役人たる者は、分をわきまえ、上役や先役を差し置いて、自分の考えを述べることは差し控えることが肝要であり、殊に譜代の士はどのような役柄でも責任をもって忠義を尽くし、奉公しなければならぬ。家老は奢侈を退け、人を見下すこ

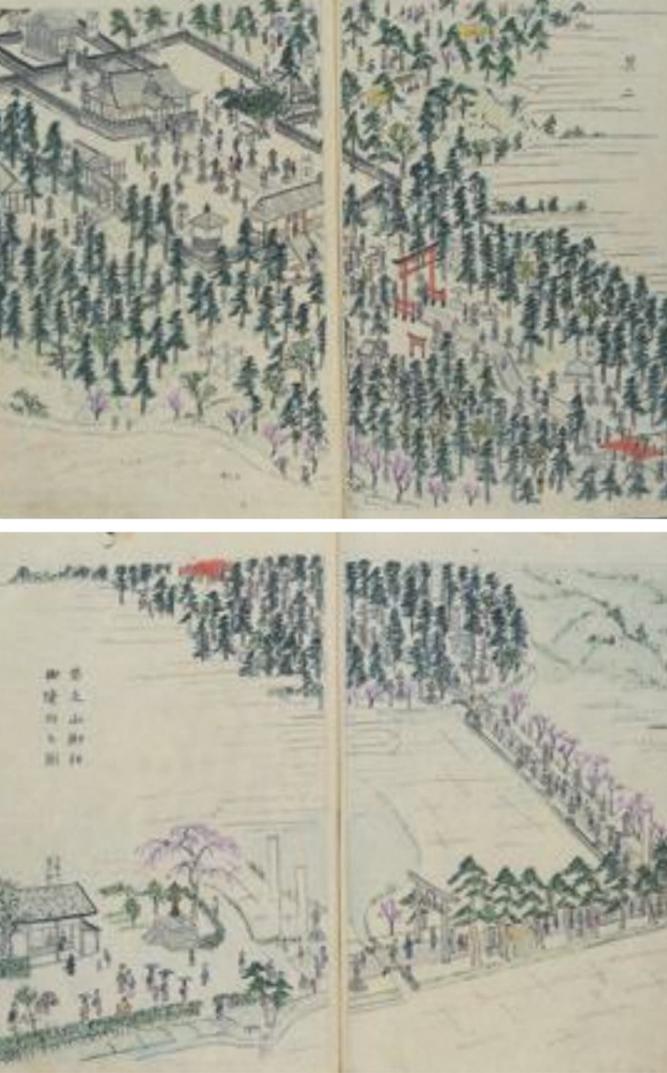
## 忠精が残した文化

越後長岡藩の代表的な文化は「茶は宗徧流、謡は金春流、花は池之坊」と言い伝えがある。これも伝説にすぎないのだが、「牧野忠精様が導入してくださった」という人がいる。

いずれも藩政初期には長岡藩に入っていたが、九代様が京から持ち込んでくれたと専らうわさが浸透している。そのことが農家や商家にも伝播して、長岡らしい芸能となっている。

牧野忠精は雨籠を巧みに描いたように、混沌とする現代を痛烈に批判すると同時に士道を明らかにし、芸を愛した。

初入部の際、三国街道宮内村赤堂に出迎えた千手町村の金物商大和屋庄左衛門が献上した和三盆と米の粉末を合わせた砂糖菓子（糖菓子）を、ことのほか喜び「越乃雪」と命名し、愛玩して御菓子とした。御菓子は蒼柴大明神の神前に捧げられていたというから、特別な思いが忠精にはあったのだろう。



横神明宮所蔵の「長岡城之面影」から悠久山御社（蒼柴神社）の景。参道の入口には銅製の大灯籠があり、松並木、桜第門と続く。新潟橋を渡ると神域に入り、社前に藩士・領民が寄贈した石燈籠が並んだ。

# 長岡市民になったお殿様

No.9

## 牧野家第十七代当主牧野忠昌氏寄稿

### 牧野家の歴史

五代忠周公は四代忠寿公の第二子で享保六年（一七二二）生まれ、明和九年（一七七二）五十二歳で没した。生来病弱であったため幕府の公職では桜田門勤番や奏者番のみで、藩政は家臣に任せながら常に領民に目を向け、藩内の災害では領民の救済を行い、また忠孝者を表彰した。多病のため一度も長岡に帰っていない。

六代忠敬公は笠間藩主牧野貞通公の第一子。享保十四年（一七二九）生まれ。十八歳で長岡藩の家督を継ぎ西丸追手門勤番を務めた。水害の多かった長岡の経済を考えて質素倹約に務め、自ら木綿服を着るなど生来聡明で将来を嘱望されたが治世三年、延享五年（一七四八）二十



復顔技術によって蘇った6代忠敬公  
制作者：復顔師 戸坂明日香

歳で没した。長岡藩主の中で最も若くして亡くなった。現在、頭蓋骨から作製した復顔があり忠敬公の顔を確認できる。

七代忠利公は笠間藩主牧野貞通公の第二子。享保十七年（一七三二）日向国延岡で生まれ、十七歳で長岡藩の家督を継いだ。三蔵火事で焼失した長岡城本丸を宝暦四年（一七五四）再築した。忠利公は正義と合理を重んじ博識で喜怒哀楽の感情を表すことがなかったが、和漢の学問に熱心で歌道を賀茂真淵に学び詠草二千余首がある。治世八年、宝暦五年（一七五五）二十四歳で没した。

八代忠寛公は五代忠周公の第一子で、幕府では江戸城西丸大手門勤番、桜田門勤番を務めた。この時代はたびたび信濃川の洪水に悩まされ、特に宝暦七年（一七五七）の損害は七万五千石に及んだため中島で「お恵みの粥」を施して領民を助けたが、幕府より多額の恩借金を受けた。明和三年（一七六六）三十一歳の若さで亡くなった。

十代忠雅公は九代忠精公の第四子で寛政十一年（一七九九）生まれ。父忠精公と同じく奏者番から老中に登りつめた。寺社奉行の時に大塩平八郎の乱が起こったが上手に采配を振るい時の將軍より褒

章を受けている。京都所司代の時に幕府は突如三天名の移封を発表した。長岡藩は武蔵川越へ、松平齊典川越藩は出羽庄内へ、酒井忠器庄内藩は長岡へ配置換えをするという、いわゆる三方領知替えであったが諸般の事情で実現しなかった。忠雅公は幕府の海防掛老中の時、筆頭老中の阿部正弘公と協力し日米和親条約をはじめ日英、日露、日仏、日蘭とも条約を結んだ。安政五年（一八五八）六十歳で亡くなった。



長岡藩歴代藩主等の墓碑17基  
昭和57年(1982)に悠久史蹟保存会の協力によって東京都三田の済海寺から悠久山菅柴神社本殿に移された「御廟」。

## 長岡開府四百年記念事業

# 次の百年へ新しい米百俵

これからの長岡を支える  
「まちづくり、ひとづくり」

長岡発祥の「米百俵の精神」。今から百五十年前、北越戊辰戦争で焼け野原となった長岡の城下。窮乏に喘ぐ日々の暮らしの中で、まちの復興はひとづくりからと、学校をつくろうとした人びとがいました。私心を捨てた彼らの懸命の呼び掛けに賛同し、国漢学校開校を実現した長岡の人びと。「まちづくりは人づくりから」。長岡の先人たちのこの篤い思いこそ米百俵の精神にほかなりません。

長岡市は、長岡開府四百年を機に、長岡が世界に誇る米百俵の精神を次代に引き継ぐとともに、新しい米百俵として人材育成事業を推進します。長岡のみならず日本のイノベーションを支える人材

を、そして国際社会を舞台に活躍するグローバルな人材を育成してまいります。

長岡開府四百年記念事業実行委員会では、この百年先を見据えたひとづくり事業をはじめ関連事業を支援するため「新しい米百俵事業協賛金」を募集しております。

皆様から、ぜひこの事業の趣旨にご賛同いただき、ご協賛を賜りますようお願い申し上げます。

長岡開府四百年記念事業実行委員会  
会長 磯田 達伸  
副会長 丸山 智  
未来投資部会長 大原 興人

## 長岡開府400年記念事業へのご寄附をお願いします

100年先を見据えた「まちづくり、ひとづくり」を応援するため、未来投資募金を募集しています。この事業の趣旨にご理解をいただき、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

●ご寄附のお申し込み・お問い合わせは事務局  
長岡市政策企画課 開府400年記念事業推進室  
TEL.0258-39-2395へお願いします。

口座名義：長岡開府400年記念事業実行委員会  
金融機関：北越銀行長岡市役所支店  
口座番号：2027262

## 良寛遷化の地にある 良寛の里美術館

長岡市島崎（和島地域）は良寛遷化の地であり、幕末三大女流歌人と言われる貞心尼との出逢いの地でもある。ここに平成三年四月「良寛の里美術館」が開館した。

良寛の里美術館は晩年の良寛書を中心に貞心尼など良寛ゆかりの人々をはじめとする文人の書画を展示している。また、良寛を紹介するビデオルームや、書が自由に書ける体験室もある。そして、四月から十月までの毎日曜日には茶室で抹茶の無料サービスがある。

今年には長岡開府四百年にあたる。越後長岡藩歴代藩主で唯一、第九代牧野忠精侯と良寛との間には国上山時代の逸話が伝えられている。忠精



良寛の里美術館  
開館時間/AM9:00~PM5:00  
休館日/年末年始  
所在地/長岡市島崎3938番地  
電話/0258-74-3700  
入館料/高校生以上500円 小・中学生300円

侯が良寛を長岡城下に迎えたいと懇請した際に、良寛が詠んだ「焚くほどは風がもてる落葉かな」の句を聞いて、良寛は長岡城下に来る意志のないことを察知し、長岡へ戻られたという。

良寛は国上山での生活に別れを告げ島崎に移住（文政九年 一八二六）して晩年を過ごした。その晩年の良寛書は良寛調が完成した時代である。この時代の良寛書は、香気な品格が漂ってまはや神品とも称されている。これらの書は、こだわりのない境地から生み出された精神の自由と心の豊かさが書に投影されているから鑑る人を魅了する。



良寛・貞心尼の対面座像

美術館のすぐ近くには貞心尼が編んだ「蓮の露」に由来する「はちすば通り」がある。ここには良寛史跡が点在し、良寛を思慕するにふさわしい小路である。多くの皆さんから美術館で良寛書の真蹟を鑑賞し「はちすば通り」の史跡を訪ねてもらふことで、しばし世俗を離れて良寛の限らない天真の心に触れられるところである。



姉妹都市フォートワースにて日本文化を通じて交流する中学生。

# 開府四百年のあゆみ

No.9

昭和五年七月十四日  
龍徳院牧野忠精の百年祭が執り行われた

## 中興の英主牧野忠精を称える

梅雨の晴れ間の快晴で奏笛の音の格調高い空気のなか、十五代当主牧野忠篤、木村清三郎市長らの参列のもと挙行された。当時の北越新報の新聞記事には「参列者約一千名と註され特に来岡した在京市出身の諸名士を初めとして全市各方面の有力者を殆ど網羅し得たかの如き観があり全く長岡市空前の盛典であった。」と市内全体で祭典として盛り上がったことが記

録されている。

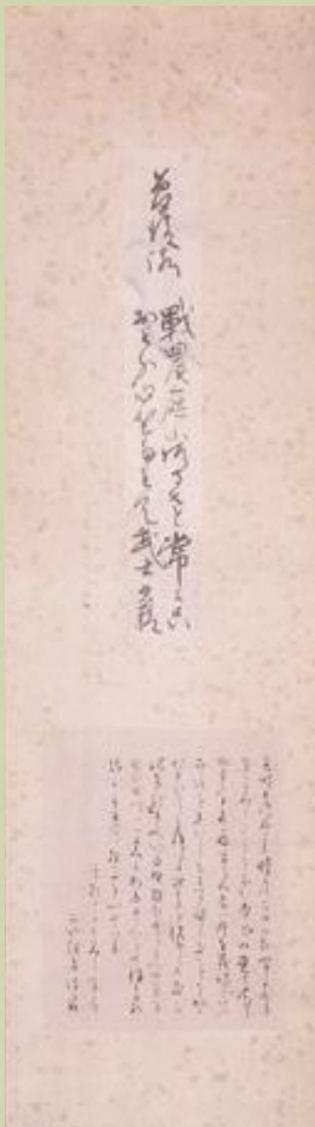
この百年祭に福島甲子三による『旧長岡藩再中興の英主牧野忠精公の百年祭を迎えて青年諸君に望む』という書籍が出版されている。忠精の「夢後詠」（戦の歌）を紹介しながら、長岡の常在戦場の精神や長岡魂、長岡精神を体現している人物であり、初代忠成、三代忠辰に続く長岡の三名君だと回顧しその治世を称えている。



百年祭にわき立つ市民（北越新報）  
（右上）互尊文庫の忠精公遺物展覧会  
（左上）公会堂における式典  
（右下）市中を練る花自動車  
（下左）兜城をかたどる屋台



長岡市公会堂（柏崎市立図書館所蔵）  
大正15年に旅館業大野甚松の寄附により現在の「アオーレ長岡」の場所に開館した。鉄筋コンクリート建てで、音楽、講演、展覧会などが催され文化の殿堂として市民に親しまれた。



### 夢後詠

戦の庭にあるそと常に只  
おもふ心をたもて武士

忠精

天明七年のとし睦月二日の夜、軍に出て  
たたかひしことをなむ夢見ぬ、覚えてつらつら  
おもふ、もののふたらん者は常在戦場といふ  
ころを暫しも忘るまじきことを切に  
おもひて、うつつに此意を詠せしか、夜も  
ふければ又いねぬ、朝起出てよへの夢を  
思ひ出つつ、とみにわすれんことのほいな  
さに、言葉の拙きをいとはず  
うつつよみしまを  
かいつけ侍りぬ

# 千也がゆく

かずや

KAZUYA REPORTS

## 長岡藩

### ゆかりの地を

### 巡る探訪記

第9回

江戸編

慶応四年（明治元年）江戸から東京と改称された。今では近代化が進み高層ビルが立ち並び江戸の時代の面影はなくなりました！

かつて長岡藩牧野家は江戸に上屋敷（皇居正門石橋正面）・中屋敷（愛宕山下）・下屋敷（渋谷と深川）の四ヶ所を幕府から与えられた。時代にもよるが忠精時代の上屋敷は江戸城内に八千坪余、会津藩邸も場所は同じで九千坪余と比べても徳川家が牧野家への信頼は厚かったのではないだろうか。

今回は江戸をテーマに長岡藩邸の面影を探しに古地図片手にブラブラ歩いてみた。現在上屋敷は皇居内の公園となり、下屋敷は下町の中に眠っていて当時



の面影は無かった。しかし痕跡に繋がる場所が一箇所あった：東京駅を出て内堀通りを進むと都会の真ん中に小高い山「愛宕山」がある。急な階段を上ると愛宕神社がありスーツ姿のビジネスマンや観光客が参拝していた。今ではビルに囲まれ江戸の町は見渡せないが以前は東京湾まで遠望できる場所だったという。黒船来航時も愛宕山から見えたのか見えなかったかはわからないが時代の移り変わりをここはずっと見ていたんだろう。

当時中屋敷は山の麓にあり広さ三六四〇坪余もあった。現在はマンションとなつて跡形も残っていないが建築中に藩邸跡や陶磁器などが出土した。昔の愛宕山からの写真を見ても長屋



中屋敷があったであろう場所  
今ではあとも形も目印もないがここに中屋敷があったはず。

執筆：石丸 千也（いしまる かずや）

長岡で美容室を営み、自らスタイリストとしても活動中。長岡の歴史を通して郷土を考え、次世代に伝えたい、と熱き想いを持った若者が集う「越後RYO-MA倶楽部」の局長。「米百俵まつり」で坂本龍馬に扮している。



愛宕神社神主様と（上）  
一緒に居るのが神主様。愛宕山の魅力を教えてくださった。春の桜時期は素晴らしいとのこと。

愛宕山（右）  
東京23区内で一番高い山「愛宕山」86段もある急な階段「出世の石段」を上ると愛宕神社があった。



下屋敷があった深川  
類りになるのは古地図のみ。広げると道は当時とほぼ同じで邸跡地はすぐわかった。藩邸跡地を歩いたが今は住宅やお店が立ち並んでいて当時の面影はなかった。



上屋敷があった皇居  
今は皇居外苑になりランニングする人や観光している人や二重橋で写真を撮っている人など様々な方達の憩いの地となっていた。

堀が見え、ここに長岡藩邸があったのは間違いなさそう。平成という時代になり江戸時代の痕跡を探し求めるのは容易いものではない。新しいものを作ることは容易い時代に変わってきた。これからの時代の為、に今だから残せるものや調べられるものを後世に残していきたい。

これから百年後開府五百年にはまた新たな発見がある事を期待したい。

柏露酒造 長岡市十日町字小島1927番  
TEL 0258-22-2234



牧野忠恭画「柏露恵比寿大黒の図」



越後長岡藩主牧野家

県内最多十六の日本酒蔵元数を誇る長岡市。その中で、旧長岡藩主・牧野家の家紋「三つ柏」を意匠とする蔵元がある。幾多の歴史的試練と困難を乗り越えてきた「柏露酒造」である。その遠祖である長岡藩御用商人・山崎家が「酒舖越中屋」として創業したのは今から二百六十数年前の宝暦元年（一七五一）。酒名は「越中屋の酒」と呼ばれていた。

明治十五年、越中屋は元藩主から同家の酒造蔵「柏屋」を譲り受け、家紋と商品名「柏露」を継承し、売上げを伸ばした。その後、大火や戦禍で廃業の窮地を迎えたが昭和三十一年に「柏露酒造」の会社名で再開に至る。今や全国各地に「越乃柏露」の名を知らしめている。平成二十六年六月三十日、当市の日本酒伝統文化を継承しようと「長岡市日本酒で乾杯を推進する条例」が制定された。酒宴の開始は「地酒で乾杯しよう!」というものだ。長岡開府四百年は、誠に地酒で祝いたいものである。

## 家紋「三つ柏」を引継ぐ蔵元美酒・越乃柏露

## 忠犬の伝説「長岡の白」

牧野家に受け継がれる「しろ」への想い

長岡の三名君のひとり、三代牧野忠辰の愛犬の伝説が、紙芝居で語り継がれている。「長岡の白」は、長岡の歴史・伝説を描き続けた高橋直矩さんが、昭和二十一年に制作した紙芝居だ。市内の今井和江さん（新潟ひょうしぎの会）が原画に感銘を受けて以来、小学校やお年寄りに向けて演じ続けている。



紙芝居の「舞台」が開かれると、そこが劇場になったかのような臨場感に包まれる。白犬と牧野忠辰の別れの場面。

話の筋は次のようになる。牧野公は、領民から譲り受けた勇敢な白犬「しろ」をたいそう可愛がった。しかし、ある日の江戸屋敷でのこと。尾張公の家臣が唐犬をけしけかけて牧野公を侮辱したのに怒り、しろは唐犬を負かしてしまふ。牧野公はしろの忠義に感謝しながらも、武家の道理を説き勘当する。うなだれて

長岡に帰ったしろは、吹雪のなかで息絶えてしまふ。白犬の存在は事実であり、牧野忠辰の治世が「生類憐れみの令」の頃と重なるのも興味深い。白犬への愛惜を語り伝える牧野家では、開府四百年の今も犬を飼うことを禁じている。「白狗の塚」は悠久山公園に残されている。

ROOTS  
400 越後長岡

長岡開府400年という節目の年を契機に我々の住む地域の歴史や文化のルーツを見つめ直そう  
平成30年は長岡開府400年

越後長岡ROOTS400 第9号 牧野忠精のルネサンス

次号予告 最終刊

発行/長岡開府400年記念事業実行委員会 平成30年5月15日  
平成30年7月15日 第2刷  
編集/越後長岡ROOTS400編集会議 代表 福川明雄  
牧野忠昌、石丸千也、恩田富太、星貴、渡辺千雅、長岡商工会議所、長岡市  
〒940-8501 新潟県長岡市大手通1-4-10(開府400年記念事業推進室内)  
Tel.0258-39-2395 Fax.0258-39-2272  
E-mail: kaifu400@city.nagaoka.lg.jp  
制作/株式会社ネオス  
協力/蒼葉神社、池田忠福、榎神明宮、愛宕神社、今井和江、長岡市立科学博物館、  
長岡市立中央図書館、長岡市立中央図書館文書資料室